

格助詞「に」の統一的分析に向けた 認知言語学的アプローチ

菅井三実*

キーワード：与格，二格，カラ格，ニヨッテ，解釈

要旨

本稿は、現代日本語の「二格」に認められる多様な用法を包括的に考察し、認知言語学的手法によって一元的に特徴づけるとともに、特に周辺の現象として扱われて来た[起点]および[動作者]の用法について、意味分析に基づいた統一的な説明を与えるものである。本稿で言う認知言語学的アプローチとは、意味を解釈と規定する意味観に基づく点であり、言語話者の解釈に依存する分析をいう。

第1節では、「二格」の意味役割を概観した上で、空間的な用法において、自動詞の主格NPまたは他動詞の対格NPが与格NPに《一体化》するという観点から一元化され、同時に《一体化》に《融合性》《密着性》《到達性》《接近性》という程度差を認めることで、個別の意味役割を一元的に整理できることを示した。第2節では、「二格」の用法のうち非空間領域の用法を取り上げ、空間次元と並行的に、《一体化》という単一の軸の上に整理できることを確認した。

第3節では、周辺の意味として、「友人に本を借りる」のような[起点]の用法を取り上げ、主格NPから与格NPへのエネルギー伝達を前提とする点で、[起点]の用法が[着点]の基本的含意を継承しており、移動主体との乖離を前景化する「カラ格」と弁別的に区別されることを具体的に示した。

第4節と第5節では、受動文の動作者標識としての「二格」を取り上げ、①受動文においても「二格」は主格または対格へのエネルギーの到達が保証される点で基本的な意味を保持する、②複合辞「ニヨッテ」は 出来事を引き起こすものをプロファイルする、③「カラ格」は、主格NPと動作者相当句とが離脱した状態にあることをプロファイルする、という点で弁別的に区別されることを例証した。

本稿の分析を通して、「二格」の意味を統一的に規定すると同時に、解釈によって多様な振る舞いを見せる「二格」の用法を統一的に説明できることが示されたと思われる。

*SUGAI Kazumi：兵庫教育大学大学院准教授

1. はじめに

本稿の目的は、現代日本語の格助詞「に」に認められる多様な用法を包括的に考察し、認知言語学的な観点から「二格」の意味を一元的に特徴づけるとともに、特に周辺の現象として扱われて来た [起点] および [動作者] の用法について統一的な説明を与えることにある。本稿で言う認知言語学的アプローチとは、意味を解釈と規定する意味観に基づく点であり、動作者という意味役割も意志性を持つという客観的な規定に基づくのではなく、言語話者の解釈に依存する分析をいう。まず、第1節で、「二格」の基本的な特性を確認した上で、空間の「二格」が、程度差をもちながらも《一体化》という概念によって一元化されることを示し、第2節で非空間次元においても同様の原理によって整理できることを見る。第3節では、能動文において「カラ格」と交替する「二格」について分析を加える。第4節と第5節で、それぞれ、受動文における動作者としての「ニヨッテ」と「カラ格」との交替を取り上げる。

2. 二格の基本的修飾機能

この第1節では与格（二格）の意味役割を概観し、機能的な修飾関係を確認する¹。

与格の意味役割は極めて多様であって、実際、いくつの意味役割を設定するかに関してさえ見解は一致していない²。本稿では、体系的な整理を見越し、次のように都合14の用法を設定しておくことにする。

- | | |
|-------------------------------|---------|
| (1) a . 針金を内側に <u>に</u> 曲げる . | [方向] |
| b . 壁に <u>に</u> ボールを投げる . | [到達点] |
| c . 手に <u>に</u> インクが付いてしまった . | [密着点] |
| d . スープに <u>に</u> 調味料を入れる . | [収斂先] |
| e . 正門に <u>に</u> 警備員が大勢いた . | [存在点] |
| | |
| (2) a . 花子を食事に <u>に</u> 誘った . | [目的] |

¹ 本論文中において、形態格に関する用語法として、「二格」と「与格」を同義に用い、同様に「カラ格」と「奪格」も同義に扱うものとする。また、本稿でいう「修飾機能」という用語は、本稿で独特の意味で用いられている。すなわち、2つの格成分に対して、前景的 / 背景的という観点から非対称性を認め、主格や対格が前景的な格成分であるのに対し、与格を背景的な格成分と分析した上で、前景的な主格や対格に対する背景的な与格の機能的な関係と呼んだものである。したがって、一般に用いられる、格成分と述語との関係を表す概念とは異なることを断っておきたい。

² 例えば、国立国語研究所（1997：119-165）では延べ27の深層格を認めており、林（1992）では、15の用法が挙げられている。

- b. 子どもに行儀作法を教える。 [伝達先]
 c. 音楽の才能に満ちている。 [要素]
 d. 幼虫がさなぎになった。 [結果]
 e. この問題は太郎にも解ける。 [経験者]
- (3) a. 友達に参考書を借りる。 [起点]
 b. 両親に結婚を反対された。 [動作者]
 c. 余りの熱さに気を失った。 [原因]
 d. 早朝 5 時に集合した。 [時間]

ここでは、便宜上 3 つのグループを作ったが、(1a)~(1e)の 5 つは空間次元の用法であり、以下で詳しく議論する。(2a)~(2e)の 5 つは非空間次元の用法であり、(1)の 5 つと平行的に整理できるとの見通しをもって第 3 節で議論する。また、(3a)と(3b)は尊格と交替する用法であり、本稿では、(3a)を第 4 節で取り上げ、(3b)を第 5 節と第 6 節で検討する。ただし、幅の都合上、(3c)と(3d)は割愛する。

格の分析にあたって方法論的に重視すべきは、①形態格そのものの意味を、できるだけ単純な形で一元的に記述することと、②その意味記述に基づいて、その格が関連する文法現象を包括的に説明できること、の 2 つの条件を満たす理論を目指さなければならないという点である。先行研究の中で、①を志向した最近の論考に、岡(2005)や森山(2005)があるが、関連する文法現象(特に交替現象)を説明する原理を提示するには至っていない。一方、②を志向した論考に森田(1989: 887-893)、森田(2006: 261-264)、中右(1998: 第 1 章)などがあるが、逆に、「に」という形式の包括的な記述に貢献していない。現実的なアプローチとして、①と②の両方を満たすためには、格そのものの記述も文法現象に対する説明原理も出来る限り単純である必要があり、本稿も、この方針に基づいて分析を行なうつもりである。

さて、上述のように、(1)の例は空間次元で用いられる「二格」であるが、(1a)~(1e)は、何ら意味的な統一性がないように見えるかもしれないが、変化主体(自動詞の主格 NP または他動詞の対格 NP)が 程度差をもって 与格 NP に近づいて行くという点で 1 つの軸の上に並べることが可能である。この分析に援用すべき概念として、山梨(1994)が空間の「二格」について提案した《近接性》《到達性》《密着性》《収斂性》という 4 つの認知的制約がある。この 4 つは独立した要因というより、いわば《一体化》という 1 つの軸の上で程度差をもった連続体として考える方が実態にあっているように思われる。ここでいう《一体化》とは 4 つの制約を統括した上位概念であり、4 つの制約は次のような階層をなしながら《一体化》の程度差を表す基準として再規定される：

《近接性》 《到達性》 《密着性》 《収斂性》

つまり、最も左の《近接性》が《一体化》の度合いも最も弱く、右に行くほど《一体化》の度合いが強くなるというものである。これを援用すると、上の例で、(1a)における「針金」と「内側」の関係は、せいぜい「内側」に近づいているということではしかないわけだから最も《一体化》が弱く、《近接性》を満たす程度のもので位置づけられる。(1b)では「ボール」が「壁」に到着するというのがデフォルト的解釈であるから《到達性》のところに位置づけられ、(1c)では「ペンキ」が「壁」に到着した上に互いに切り離し得ない状態になるという点で《密着性》に位置づけられる。最後の(1d)では「調味料」と「スープ」が混ざり合って明瞭な区分がなくなるので、最も《一体化》の度合いが大きく《収斂性》を満たしているといえることができる。

ただし、ここで用語法の問題に触れておきたい。山梨(1994)の提示した4つの概念のうち、《近接性》は、《一体化》という動的な概念の中に位置づけられることから、以下の議論では正確さを期して《接近性》とし、《収斂性》は、自然科学において異なる意味で用いられていることを考慮して以下では《融合性》と呼び代えることとする。

このように記述してくると、では、与格NPは自動詞構造の主格NPや他動詞構造の対格NPとの関係において、どこまで《一体化》するのかという問いが当然予想される。この問いに対しては“動詞の意味内容の範囲で、デフォルト的には可能な限り一体化する”というのが本稿での回答である。というのも、(1a)において「針金」と「内側」の関係を《接近性》というタームで記述したのは、動詞「曲げる」によって表される事象が《接近性》以上の一体化を可能にしないためにほかならない。同様に、(1b)における「ボール」と「壁」の関係および(1c)における「ペンキ」と「壁」の関係を、各々《到達性》および《密着性》というタームで記述しているのも、それぞれの動詞「投げる」および「塗る」の表す事象において可能な限り《一体化》を進めた解釈である。ここでいう《一体化》の度合いに関する判断は、当然、言語使用者の解釈を含んだものであり、(1d)において「調味料」と「スープ」が《融合性》を満たすのは、単に動詞「入れる」の意味だけから導かれるものではなく、料理というコンテキストの中で「調味料」と「スープ」の関係に対する経験的な知識を踏まえて判断されることに留意されたい。

あわせて明確に付け加えておかなければならないのは、決して「二格」が4種類に分けられるのではなく、むしろ《一体化》という性質には程度差があって、4つの基準を援用すると意味役割が一元的に整理できるという点であり、この意味で4つの制約が便宜上の目安に過ぎないことを確認しておきたい³。

ところで、上述の分析は、従来の記述に対して訂正すべき点を指摘することにも貢献する。「二格」標示の制約として良く知られているのは、田窪(1984:92)が述べているように、動詞「来る」や「行く」などを述語とする移動表現において[着点]が非場所名詞のとき[着点]を

「二格」で標示できないというものであり、次のように例示される。

- (4) a. 花子が公園に^二来た。
 b. ??花子が太郎に^二来た。
 c. 花子が太郎の^二ところに来た。

この例のように「来る」を述語とする動詞句内において、(4a)が示すように[着点]が場所としての「公園」であれば「二格」で標示されるのが通常であるが、(4b)のように[着点]が非場所名詞になると単純な「二格」で標示することはできず、(4c)のように「のところ」などを付与することによって場所性を形式的に保証する必要があるとされる。しかしながら、(4b)の容認度が落ちることを単に「太郎」という名詞の客観的な場所性の問題に帰着させるのは適切でない。(4b)が容認不可能になるのは「来る」という動詞が求める《到達性》を「花子」と「太郎」という組み合わせでは満たし得ないという単純な理由によると考えればよいからである。実際、次の例が示すように、移動主体と着点 NP の組み合わせが《到達性》を満たせば、[着点] NP が非場所名詞であっても「二格」で標示することができる。

- (5) a. 小さな虫がまた顔に^二来た。
 b. 花子に^二1通の電報が来た。
 c. 片山候補には^二党の幹部や現職大臣が次々と応援に来ました。

つまり、移動主体が「小さな虫」や「手紙」のように、相対的にサイズが小さく、人間の身体への《到達性》を満たすものであれば、十分「二格」で標示できるのであって、単に「顔」や「太郎」といった名詞の場所性の問題ではないことが確認されると思われる。(5c)は、国会議員の選挙運動期間中のニュースで発話されたものであるが、移動主体が「現職の大臣」でありながら、着点の候補者は「ところ」のような形式名詞を伴うことなく、単純な「二格」で標示されている。このとき、着点が「二格」で標示できるのは、選挙の応援という文脈であれば、経験的に、候補者と並び立って演説する状況が容易に想定できることから、「現職の大臣」が移動するのは候補者の近辺と考えてよく、近辺への《到達性》を満たすことが可能であるためと説明できる。

³ 先行研究の中で、「に」を一元的に分析する試みに国広(1967, 2006)があり、意義素論の立場から「密着の対象」という概念で特徴づけている。本稿の分析との関連で言うと、本稿が採用した《密着性》という概念は《一体化》という上位概念に一元化される4つの下位概念の1つであるが、これを国広(1967, 2006)が「に」の意義素と規定したということは、4つの下位概念の中で《密着性》がプロトタイプ的な性格を持つことを示唆するものである。ただ、本稿ではプロトタイプ的な意味の認定には踏み込んでおらず、実際に《密着性》がプロトタイプ的な意味として認定できるかどうかの議論は別稿に委ねることとしたい。

さて、ここで考慮に加えなければならないのが(1e)のような[存在点]であり、空間における他の用法と異なり、見かけ上、位置変化(移動)を伴わない。

- (6) a. テーブルの上にコップがある。
b. 西の空に美しい虹を見た。

[存在点]という役割は、(6a)のように存在詞「ある」を述語とする典型的な存在文だけでなく、(6b)のように一般動詞を述語とする文においても認められるが、いずれのケースも、述語動詞に動的な変化が含まれないのに、下線部のNPを「二格」で標示することによって“位置づける”という操作が認められることに注意されたい。というのも、次のように「デ格」と対照させるとき“位置づける”か否かという観点によって弁別的な差異を示すからである。

- (7) a. 敷地内に小型シェルターを作った。
b. 敷地内で小型シェルターを作った。

(7a)のように「敷地内」を「二格」で標示したとき「小型シェルター」は「作る」という行為の最終局面において「敷地内」に位置づけられると解釈されるが、(7b)のように「敷地内」を「デ格」で標示したときは「小型シェルター」の製作が「敷地内」で行われることを示すに過ぎず、そのまま「敷地内」に位置づけられるという含意はない。かくて、[存在点]の「二格」には《密着性》が認められるので、実質的に[密着点]に準じるものとして扱ってよいというのが本稿の分析である⁴。

以上、本節では、空間の「二格」が《一体化》という1つの軸で一元的に把握されるとともに、[存在点]も移動主体が位置づけられるところとして特徴づけられることを確認した。

3. 非空間領域の多様性

第2節では「二格」の用法のうち非空間領域の用法を取り上げる。

前節で述べたように、空間においては移動NPが着点NPとの間で《接近性》 《到達性》 《密着性》 《融合性》という程度差をもって《一体化》する特質を見たが、非空間次元におい

⁴ 柴谷(1978: 282-285)は、場所NPの格標示における「に」と「で」の使い分けについて、動詞が動的動詞のときには「で」で標示されるのに対し、静的動詞のときには「に」で標示されると述べているが、(7)の例によって明確に反証される。また、中右(1998: 第1章)は、「で」と「に」の相違について、「で」が偶発的な位置関係を表すのに対し、「に」は不可欠な位置関係を表すと言うが、この分析も(7)の例には有効ではない。

ても同様の一元化が可能であると思われる。具体的には、あらためて次の(8a)~(8d)が示すように、自動詞の主格または他動詞の対格と与格 NP との間に《一体化》の関係と、その程度差が認められる。

- | | |
|------------------------------|---------|
| (8) a . 花子を <u>食事</u> に誘った . | [目的] |
| b . 上司に <u>事情</u> を話す . | [伝達先] |
| c . 会社が優秀な人材に <u>富む</u> . | [要素] |
| d . 液体が <u>気体</u> に変わる . | [結果] |

(8a)では比喩的に「花子」を「食事」に近づけているという点で《接近性》までしか満たさないが、(8b)では「事情」が「上司」に到達するという点で《到達性》を満たし、(8c)では「会社」と「人材」は不可分の関係にあるという点で《密着性》にまで達していると言ってよい。また、(8d)においては「液体」と「気体」が同一の対象であるという点で《融合性》を満たしていることができる。

もう少し具体的に見ていくと、4つのうち《一体化》の度合いが最も弱い《接近性》は、次のような用法の集合として捉えられる。

- | |
|-------------------------------|
| (9) a . 太郎が <u>父親</u> に似て来た . |
| b . 花子が <u>先輩</u> に憧れる . |
| c . 信用回復に <u>力</u> を注ぐ . |

(9a)~(9c)は、従来それぞれ [基準] [志向先] [目的] のように異なる意味役割を与えられていたが、(9a)および(9b)のような自動詞構造の主格 NP であれ、(9c)のような他動詞構造の対格 NP であれ、与格 NP に抽象的な接近が認められるという点で本質的に変わらない。すなわち、(9a)では容姿や仕草において主格の「太郎」が与格の「父親」に近づいているのであって、(9b)でも主格 NP 「花子」の気持ちが「先輩」に近づいて行っていると比喩的に解釈される。また、(9c)では対格の「力」が「信用回復」に向けられており、この点で《接近性》という観点から一元化することが可能である。もはや、(9a)~(9c)に異なる意味役割を与えることは皮相的な問題に過ぎない。

第2の《到達性》を満たす例に次のようなものが観察される。

- | |
|-------------------------------|
| (10) a . 会員に <u>日程</u> を伝えた . |
| b . 恩師に <u>講演</u> を依頼した . |

ここでは物理的には何ら位置変化（移動）を含んではいないものの、与格 NP は比喩的に移動主体の受け手として解釈される。これらの例が《到達性》を満たすと言えるのは、デフォルト的に伝達内容ないし意向が各々「全員」や「恩師」に到達していると理解されるからである⁵。

3番目に《一体化》の度合いが大きい《密着性》は、次のように例示される。

- (11) a. 全員が自信に満ちあふれる。
b. 花子が感冒にかかっている。

ここで、与格を《密着性》という用語で特徴づけられることは、(11a)および(11b)における主格 NP と与格 NP の関係から自明であろうと思われる。つまり、(11a)に見られる「全員」と「自信」の関係は、「全員」と「自信」が離れたところにあって接近しているという関係にないという点で《接近性》に該当せず、「全員」と「自信」が外的に接する関係にないという点で《到達性》にも該当しない。また、「全員」と「自信」が1つになったわけでもないという点で《融合性》にも該当せず、結局、「自信」という症状が「全員」という人間の身体に密着しているという意味において、《密着性》を満たしているということができる。同様に、(11b)に見られる「太郎」と「感冒」の関係は、《接近性》でも《到達性》でもなく、また、《融合性》でもないという点で、《密着性》を満たすレベルにあるというのが本稿の分析である。

4つのうち《一体化》の度合いが最も大きいのは《融合性》であるが、次の例が示すように、非空間次元においては主格 NP (または対格 NP) が与格 NP と実質的に同じ対象を指示するような関係が成立する。

- (12) a. 隊員達が制服姿に着替える。
b. *隊員達が制服姿に整列する。

(12a)における「二格」の「制服姿」が「ガ格」の「隊員達」と《融合性》を満たすというのは、両者が同一の対象を異なる側面から捉えたものであり、換言すれば「隊員達 = 制服姿」の関係が成り立つという点で両者が指示対象において1つに収斂するとみなされるからである。このとき「隊員達 = 制服姿」の関係は、動詞「着替える」の表す事象を経て初めて成立するのであって、(12b)に挙げた「整列する」のように、「隊員達」と「制服姿」の関係に影響を及ぼさない動詞の場合は非文になる。このように、「制服姿」を「二格」で標示したときは、いわば 制服姿 から +制服姿 への変化が起こっており、この点で、次のペアが示すように「デ格」と弁

⁵ 第1節(1)では挙げなかったが、使役の被動作者も“影響が到着するところ”という意味で非空間次元の《到達性》を満たすものとして特徴づけることができる。

別的に機能する。

- (13) a. *隊員達が制服姿で着替えた。
b. 隊員達が制服姿で整列した。

このペアのように、「制服姿」を「デ格」で標示したとき、(13a)の「着替える」のように、「隊員達」と「制服姿」の関係に変化を生じさせる意味の動詞と共起できず、(13b)の「整列する」のように、「隊員達」と「制服姿」の関係に変化に影響しない動詞とのみ共起できるという事実から、「デ格」は、事象を通して「隊員達 = 制服姿」の関係に変化が生じないことが確認される。この点で、「デ格」は、事象を通して《融合性》を充足するだけの変化を経なければならぬ「二格」と明確に差別化されるのである。

さらに「二格」の《融合性》については、次の例が示すように、本来的には同定関係を成立させるような意味内容でない動詞が述語であっても、与格と対格との間で《融合性》を充足することがある。

- (14) a. 太郎が土産に香水を買った。
b. *太郎が土産で香水を買った。

ここで、述語動詞「買う」は同定関係を成立させるような意味内容ではないが、(14a)のように、下線部の「土産」を「二格」で標示すると対格 NP「香水」との間で「香水 = 土産」の関係が成立する。これに対し、(14b)のように「土産」を「デ格」で標示すると「買う」という事象の前から「香水 = 土産」の関係が成立していることになり、この解釈が経験的に不自然であるため非文と判断される。

以上の4つの非空間的な「二格」に加えるべきは、国立国語研究所(1997: 119-120)において「経験者」と呼ばれたものがある。具体的には、次の(15)のような知覚文や能力文における「二格」であるが、広い意味での「存在点」と考えるというのが本稿の立場である。

- (15) a. 君に私の声が聞こえますか。
b. 太郎に後任が務まるとは思えない。

これらの「二格」を「存在点」と分析するのは「知覚文」や「能力文」が広い意味で存在文として範疇化されるからであるが、その論拠については菅井(2002)を参照されたい。

かくして、山梨(1994)がいう《到達性》《密着性》《融合性》《接近性》を援用することで、

第1節で挙げた(1)と(2)を次のように整理することができる。

スケール	空間次元	非空間次元
《接近性》	[方向]	[目的]
《到達性》	[到達点]	[伝達先]
《密着性》	[密着点]	[要素]
	[存在点]	[経験者]
《融合性》	[収斂先]	[結果]

ここで,[存在点] を [密着点] と同じところに置いたのは, 移動という側面が前景化されないものの結果的な側面において [存在点] も [密着点] と同じように与格 NP に位置づけられるという特徴が認められるからである。また,[経験者] というのは知覚文や能力文における「二格」であるが, 非空間次元で《密着性》を満たす用法として特徴づけたのは, 前述のように広い意味で [存在点] と同質のもののみなされるからである。

以上, 本節では, 非空間次元においても空間次元と同様に《接近性》《到達性》《密着性》《融合性》を分類の基準とすることで「二格」の大部分を単一の軸の上に整理できることを確認した。なお, 本稿における「に」のアプローチは, 国広(1994)の「現象素」あるいは田中(1990)の「コア図式」のように, 多義的語義をすべて包含するようなスキーマを想定し, その一部にさまざまな認知的な焦点を置くことによって諸現象を一元的に説明しようとする立場に立つ。次の第3節から第5節で提示する分析は, 第1節および第2節で導入したスキーマの意味が様々な文法現象の説明に適用可能であることを示すものである。

4. 与格による起点標示

第3節では, 第1節(3)で挙げた諸用法のうち[起点] について考察する。[起点] の「二格」は, 対義関係にある「カラ格」と交替する点で特異と言える。

まず, 広義の [起点] 標示について, 与格と奪格の交替は次のようなペアで例示される。

- (16) a. 花子が先輩に携帯電話を借りた。
 b. 花子が先輩から携帯電話を借りた。

「二格」と「カラ格」が対義的な概念として用いられることを考えると、両者が交替するのは奇妙なようにも思われるが、この現象に関しては、良く知られているように、すでに池上（1981：121-170）などによって、場所理論の立場から《起点 着点》の非対称性として論じられ、[起点] の与格は [着点] が一方向的に転用されたものと分析されている。この分析を援用し、主格 NP からのエネルギーと移動主体を黒丸 で、着点と起点を円 で表せば、格標示による移動主体と起点ないし着点の関係は次のように図示できる。

- (17) a. [着点] の与格 —————→
 b. [起点] の与格 ←————
 c. [起点] の奪格 ←————

いま、右向き矢印を順方向、左向きを逆方向と呼ぶと、[着点] の与格は、主格 NP から着点 NP への順方向的なエネルギー伝達が《到達性》を満たしていることを表し、[起点] の与格は、順方向的な着点 NP への《到達性》を前提に、その [着点] を [起点] として逆方向に汎用したものである。また、[起点] の奪格は、移動主体の が起点 NP から離れている関係を示し、順方向的な動きは何ら前提としない点で、与格標示と明確に区別される。重要なのは、[起点] の与格が [着点] の与格を前提にしているということであり、起点 NP が「二格」で標示される時は、起点 NP に対する順方向的な働きかけが含まれていることを確認しておきたい。ここでいう順方向的な“働きかけ”というのは、主格 NP から起点 NP (= 着点 NP) へのエネルギー伝達であるから、上の(16)の例に関して言えば、「携帯電話を借りることを 申し込む ないしは 求める」という側面に相当する⁶。この順方向的な側面を暫定的に“働きかけの局面”と呼び、逆方向的な移動主体(対格 NP)の動きを“受け取りの局面”と呼ぶと、[起点] の格標示に関する基本原則は次のように整理される。

- (18) 起点の「二格」標示は起点 NP への順方向的な“働きかけの局面”が前提とされ“働きかけの局面”と“受け取りの局面”を併せた全体をプロファイルするのに対し、起点の「カラ格」標示は逆方向的な“受け取りの局面”のみを前景化し、移動主体が起点 NP から離れている関係をプロファイルする。

この原理を上(16)に適用すると、(16a)のように「先輩」を「二格」で標示したときは、主格 NP「花子」から「先輩」に「借りる」ことを求めたことが前提となっているのに対し、(16

⁶ 本節で援用している「エネルギー伝達」という考え方は Talmy (1985) によるものである。

b)のように「カラ格」で標示したときは「花子」が「先輩」に「借りる」ことを求めるという働きかけの側面が背景化され、結果的に「先輩」から「携帯電話」が一時的に移動していることが前景化されているということになる。

この交替現象に関連して問題になるのは、次のペアが示すように「二格」での標示に一定の制約が課せられるというものである。

- (19) a . 太郎が先生に本を借りた .
 b . 太郎が先生から本を借りた .
- (20) a .?? 太郎が図書館に本を借りた .
 b . 太郎が図書館から本を借りた .

このような2組のペアを根拠に、従来の客観主義的な分析は、下線部が[動作者]の意味役割を担うかどうかに「二格」標示の成否を帰着させてきた。実際、柴谷(1978:297-304)や杉本(1986:365-366)およびKabata and Rice(1997)によれば、問題のNPが与格で標示できるのは[起点]であると同時に[動作者]としても解釈可能なときであり、[起点]としてしか解釈できないときは奪格での標示のみが許されるという。この「動作者説」に従うと、(19)の例で「先生」が「二格」で標示できるのは「先生」が「本」の[起点]であると同時に[動作者]でもあるからであり、(20)の例で「図書館」が「二格」での標示が許されないのは「図書館」が[動作者]になれず[起点]としてしか解釈できないためということになる。しかしながら、従来の「動作者説」は妥当ではない。なぜなら、次の例が示すように、[起点]相当句を動作者として解釈することが同じように困難な名詞句でも「二格」での標示が許されるケースが観察されるからである。

- (21) a . 太郎が銀行に資金を借りた .
 b . 太郎が銀行から資金を借りた .

下線部の「銀行」は、[動作者]として解釈されづらいという点で上の例の「図書館」と変わりなく、[動作者]として解釈できるかどうかに関して両者を区別する理由はない。それにもかかわらず、(21a)のように「銀行」が「二格」で標示され得るということは、下線部のNPが動作者としての解釈を持ち得るかどうかを「二格」標示の条件と考えることの誤りを示していると言える。上の(18)に挙げた説明原理に従えば、下線部の格標示に対する説明は次の通りである。まず、(20)のペアにおいて下線部の「図書館」が「二格」で標示できないのは「図書館」が図書

の閲覧・保管・貸し出しを役割とする公共機関であって、あえて「図書館」に“働きかけ”をする必要がないためであり、本理論の用語で言えば「図書館」への“働きかけ”をプロファイルすることが不自然であるためと説明される。同時に、(20b)のように「カラ格」でなければならぬ理由も明白であって、そもそも図書館に所蔵されている本を借りるとき、「本」は「図書館」から離れて外部に持ち出されるのが一般的であり、したがって、必然的に“受け取りの局面”がプロファイルされるからである。他方、(21)のペアにおいて、(21a)のように「銀行」が「二格」で標示されるのは、「銀行」に融資を希望する際には、借りる側からの“働きかけ”が必要だからであって、同時に、(21b)のように「カラ格」での標示も可能なのは“働きかけの局面”を背景化して「資金」が「銀行」から離れる“受け取りの局面”をプロファイルすることも可能であるためということになる⁷。

もう1つ、本稿の分析の妥当性を積極的に支持する例として示したいのは、次のように「二格」での標示が可能でありながら、「カラ格」で標示できないケースである。

- (22) a. 太郎が大家さんに部屋を借りた。
 b. ??太郎が大家さんから部屋を借りた。

従来の分析は、基本的にすべてのケースで「カラ格」の標示が可能で、動作者性が満たされたときにのみ「二格」での標示も可能になるという趣旨であったので、(22)のように「カラ格」で標示できない理由を説明できなかった。本稿での分析に基づくと、起点 NP が「二格」で標示されるのは経験的に「部屋を借りる」というとき「大家さん」への働きかけが前提になるからであり、逆に、起点 NP を「カラ格」で標示できないのは、仮に“働きかけ”を前景化しない場合でも「借りる」という事象によって「部屋」が「大家さん」から離れるとの解釈が不自然であるためと説明される。以上の点に関して、少なくとも、あらかじめ[起点]か[起点+動作者]かが決まっていて、前者であれば尊格で標示し、後者であれば与格で標示するという客観主義的な分

⁷岡(2005:13)は、受益構文で[起点]を「二格」で標示するのに「働きかけ」は必要条件ではないと述べ、その証左として「私は花子に思いかけずプレゼントをもらった」のような例を挙げているが、本稿でいう「働きかけ」を十分に柔軟に考え、発話時点までの長い時間をかけて行われる可能性を考慮に入れれば、決して反例にはならない。なお、本誌の査読者から、次の(i)のような文について容認度が決して低くないのではないかとの指摘を受けたが、全くの初対面であっても、主体からの働きかけがあれば与格(二格)での標示が可能であることは本稿の分析にとって何ら問題のない事象であり、反例にはならない。

- (i) 初めて会ったばかりの人に本をもらった。
 (ii) 名前を聞いたこともない人に本をもらった。
 (iii) 名前を聞いたこともない人から本をもらった。

むしろ、本稿の分析にとって重要なのは、(ii)と(iii)のように、“働きかけ”を含まないような文脈での発話であり、この文脈では、(iii)との比較において、微妙ながらも、(ii)の容認度が相対的に低くなる。これにより、“働きかけ”を含まない事象において与格標示が不適格であり、ひるがえって、与格標示が“働きかけ”を前提とするという本稿の分析が支持されるものと思われる。

析は決定的に間違っていると言わなければならない。

なお、与格の分析と直接関連するものではないが、(21)および(22)のケースとの関連で、次のようなペアにおける容認度の差異は、賃借に関する「図書館」と「銀行」の百科辞書的な知識の差異を明らかにする証左となるであろう。

- (23) a. ? 図書館が本を貸してくれた。
b. 銀行が資金を貸してくれた。

このペアにおける(23a)と(23b)の差異は、図書館と銀行の事業が質的に異なることを具体的に示していると言ってよい。(23a)のように、「図書館」からの「本」の賃借を表すのに、恩恵を伴う構文を用いたときに容認度が下がるということは、図書館というものが公共的な事業として貸し出しを行っているのであって、利用者からの働きかけは強いものである必要がないことを反映しており、(23b)のように、「銀行」からの「資本」の賃借を表すのに、恩恵を伴う構文を用いても容認度が安定するということは、「資金」の賃借に際して銀行には働きかけが必要で、その働きかけに応じて初めて賃借が成立することを反映していると言えるからである。このことは、(21)および(22)において、賃借に関する「図書館」と「銀行」の格標示において、“働きかけの局面”を含むかどうかに関する本稿の分析にとって、間接的な証拠となると思われる。

さらに、動詞「借りる」との関連で、動詞「もらう」についても同様の原理で説明できることを確認しておこう。次の例が示すように、動詞「もらう」のケースも、起点の格標示において「二格」と「カラ格」で交替が観察される。

- (24) a. 先生に油絵をもらった。
b. 先生から油絵をもらった。

このケースでも、(24a)の「二格」と(24b)の「カラ格」は意味的に異なるのであって、本稿の理論によれば、(23a)では「先生」に対する“働きかけの局面”が含意されるのに対し、(24b)の「先生」は単なる起点としか解釈されていないということになる。実際、“働きかけの局面”が背景化されると、次の(25a)のように「二格」での標示が容認不可能になり、(25b)のように「カラ格」でのみ標示されることになる。

- (25) a. ? 警察に感謝状をもらった。
b. 警察から感謝状をもらった。

(25a)の容認度が下がるのは、「警察」が市民に「感謝状」を贈る際、市民が警察に働きかけをして贈与されるものではないという経験的な事実に着させることができる⁸。

以上、本節では、「二格」は、[起点]を標示する場合でも、エネルギー伝達を前提とする点で[着点]の基本的含意を継承することを示したが、このことから、格助詞の場合は、比喩的に拡張した場合でも、コアの意味が消えないという点に特徴があるように思われる。

5. 受動文における「二格」と「ニヨッテ」

第4節と第5節では、受動文において動作者標識としての「二格」を分析する。能動文において主格で標示されていたNP成分が受動化によって「ニ」や「ニヨッテ」などで標示されるようになった成分(能動文において主格で標示される本来的な[動作者]と区別するため、本稿では「動作者相当句(agent-like)」と呼ぶことにする)は、次の例が示すように「ニヨッテ」「ニ」「カラ」で交替する。

- (26) a. 太郎は指導教員に論文を批判された。
 b. 太郎は指導教員から論文を批判された。
 c. 太郎は指導教員によって論文を批判された。

この現象に関し、主要な先行研究として知られる細川(1986)では、まず「二格」と「ニヨッテ」の差異について、「二格」が直接的な関与者を標示するのに対し、「ニヨッテ」は間接的な関与者を標示し、引き起こすものを表すと述べている。また、「カラ格」については、主語と動作者相当句の両方が「有生(animate)」のとき使用できると記述している。

これと同時に、細川(1986:123)は、動詞の意味との関係から次のように整理している。すなわち、動詞の意味によって動作受身と状態受身という対立を指定し、動作受身では「二格」と「カラ格」が用いられ、「ニヨッテ」は用いられない。逆に、状態受身では「二格」と「カラ格」は用いられないか、用いられにくくなり、「ニヨッテ」が用いられるとされる。ただし、ここでいう状態受身という概念には注意が必要で、細川(1986)の用語法では“動作に伴って結果を強く含意する”とされる点に注意しなければならない。実際、例えば「殺す」や「壊す」のような動詞を述語とする受身文も、結果を強く含意するという点で状態受身とし

⁸ 動作者説の立場から見れば、(20)の「図書館」と(21)の「銀行」は意味的に異なり、「図書館」は動作者として解釈されることがないのに対し、「銀行」は動作者として解釈され得るというであろう。しかし、そうであるなら、(25)の「警察」も動作者として解釈できることになり、その「警察」は「二格」で標示できるはずであるが、実際には(25a)の「二格」標示は容認されないことから、これらの事実を“動作者説”で説明できないことは明らかである。

て扱われることになる。

これらの点を含めて、細川（1986）の記述を簡潔に整理すると、「ニヨッテ」は 結果を強く含意する受動文 において 間接的な関与者 引き起こすもの と特徴づけられ、「二格」は 動作に力点が置かれる受動文 において 直接的な関与者 と特徴づけられる。また、「カラ格」については 動作に力点が置かれる受動文 で 主語と動作者相当句の両方が有生のとき使用可能 と特徴づけられる。

ところが「ニヨッテ」に関して、細川（1986）の分析に反する例が観察される。次に挙げるように、間接的な関与者でもなく、結果を強く含意するわけでもないのに、動作者相当句が「ニヨッテ」で標示されるものである。

- (27) a. 容疑者は会社員らに目撃されている。
 b. 容疑者は会社員らによって目撃されている。

ここで「会社員」は直接的な関与者であり、しかも「目撃する」ことに何ら強い結果の含意は認められない。それにもかかわらず「会社員」は(27b)のように「ニヨッテ」での標示が可能であり、これによって、複合辞「ニヨッテ」を特徴づける3つの条件のうち、間接的な関与者であることと 結果を強く含意する ことは言語事実を正しく反映していないことが分かるであろう。そうすると「ニヨッテ」に関して有効な意味特徴は 引き起こすもの しか残らないということになる。

ここで注目すべきは、そもそも複合辞「ニヨッテ」が格助詞「二格」や「カラ格」と文法的地位において異なり、修飾機能も異なるという点である。実際、菅井（2002）で詳説されているように、「二格」や「カラ格」が、主要な格成分（自動詞構造の主格成分または他動詞構造の対格成分）との間で、格成分と格成分 という2項的な関係で結び付くのと異なり、複合辞「ニヨッテ」は“格助詞「二格」+動詞「ヨル」の連用形”という動詞句に準じる構造をもち、それが格標識に文法化されたものであって、動詞句に格支配されるというより、形態統語的に主動詞句全体と並列される関係にあり、なおかつ、「ニヨッテ」句が主動詞句に対して従属的な地位にあることは自明である⁹。いま、複合辞「ニヨッテ」が主動詞句を修飾するという形態統語的な地位を考えると、複合辞「ニヨッテ」の意味については“引き起こすもの”に焦点が当てられるという松田（1986）の分析に理論的な動機づけが与えられることになる。実際 Hopper and Thompson（1984）らが言うように、言語構造において“引き起こす”という機能は動詞の担うものであり、複合辞「ニヨッテ」が動詞を修飾することから自然に導かれるからである¹⁰。

かくて、複合辞「ニヨッテ」が 引き起こすもの をコード化すると考えることにより、次のように、受動文において排他的に「ニヨッテ」しか用いられないケースについても一貫した原理

で意味的な説明を与えることができる。

- (28) a. *関係者に記念式典が行われた。
b. 関係者によって記念式典が行われた。

つまり「行う」のように語彙的に行為そのものを表す動詞を述語にした受動文で動作者相当句の格標識が「ニヨッテ」でなければならないのは、受動文全体が出来事の生起として把握されるためというものである。これにより「ニヨッテ」が引き起こすものをコード化するという意味分析に証左が与えられることになる。

最後に、本稿の分析によって説明できる事象を2つ指摘したい。1つは、次の例において、動作者相当句が「ニヨッテ」で標示できない理由の説明である。

- (29) a. 犬に噛まれた。
b. ??犬によって噛まれた。

(29b)のように動作者相当句の「犬」を「ニヨッテ」で標示できない理由について、細川(1986)は、動作が行為的で結果の側面が取り上げられていない上に、「犬」は直接的関与者であり、間接的関与者を表す「ニヨッテ」では適合しないためと述べている。しかしながら、上述のように、直接的な関与者であっても「ニヨッテ」で標示することは可能であって、直接的な関与者であることや結果の含意が強くないことは「ニヨッテ」が用いられないことの本質的な理由にならない。本稿の分析によれば、「ニヨッテ」は動詞句全体を修飾し生起をつかさどるものであり、(29)の事象が出来事の生起として解釈することが困難だからであるのに対し、「二格」で標示されるのは主格 NP との2項的な関係で捉えられなければならないためと説明することができる。

もう1つは、受動化可能性とも関連する問題であるが、次の2組のペアの中で、(31b)の動作者相当句を「ニヨッテ」で標示したときに限り受動文が成立することに対して意味的な説明を与えることができるというものである。

- (30) a. *教室で担任に机が叩かれた。

⁹ただ、複合辞「ニヨッテ」の文法化が進んで、格標識に近づくほど、他の格との2項関係は強くなる。実際、例えば「時間割は履修科目数によって異なる」のような用法では、すでに引き起こすものという原義が希薄化し、2項的な関係が成立していると言ってよい。

¹⁰実際、引き起こすものを標示するという「ニヨッテ」の意味は、受動構文に限った意味用法ではなく、能動文でも、例えば、「研究者によって解明が進んでいる」のように用いられる。

b. *教室で担任によって机が叩かれた。

(31) a. *壇上で歳男達に太鼓が叩かれた。

b. 壇上で歳男達によって太鼓が叩かれた。

(30)の受動文が成立しない理由について、細川(1986)は「できる限り有生名詞句を主語に選べ」という制約によって処理しようとしているが、このペアで注目すべきは(31b)である。(31b)は、主語名詞句が無生である点で(30)と何ら変わりなく、結果の含意がない点でも(30)と変わらないにもかかわらず、動作者相当句を「ニヨッテ」で標示したときに限り容認される。このことは、細川(1986)がいうナイーブな制約では説明できず、また「述語が主語の属性を特徴づけるとき受動文が成立する」という益岡(1982)の分析も有効ではない。本稿での分析によれば、出来事の規模が大きくなることで、イベントの生起としての解釈が相対的に容易になるためと説明されることになる。最も重要なことは、ここで問題としている現象が、主語の「有生性(animateness)」や述語の語彙的意味から一義的に説明されるものではなく、事象をどのように捉えるかという発話者の解釈(construal)に帰着されるという点である¹¹。

以上、本節では「ニヨッテ」が動詞句を修飾し、動作者相当句の標識として出来事の生起をかさどるものとして特徴づけられることを例証した。

6. 受動文における「二格」と「カラ格」

この第5節では、第4節に続いて、他の格との2項的關係という基本的性質を共有する「二格」と「カラ格」に絞って、受動文における意味的な差異を明らかにする。

先行研究のうち、砂川(1984: 77-78)や森田(1988: 312)では、受動文の「二格」について直接的に「関与するものと記述しているが、この直接的」という用語には注意を要する。というも、直接的」という概念を「他のものを介在させない」と考える限り、次の例が示すように、この意味での直接性は「二格」と「カラ格」を区別することに役立つからである。

(32) a. A国はB国に直接攻撃された。

¹¹ 金水(1991)によれば、「ニヨッテ」は欧文直訳文の中で発展したものであり、主語の有生性(animateness)との関連では、無生(inanimate)の名詞句が主語に昇格する受動文の発達を促したという。その当時の「ニヨッテ」と現代の「ニヨッテ」が完全に同じ意味を有していたかは検討しなければならないところであるが、無生名詞句を主語にとる受動文と「ニヨッテ」に相関関係があるということから、無生の主語が自ら事態を引き起こさない事象において、「ニヨッテ」が事態の生起を引き起こす役割を担ったという説明は自然なものと思われる。

b. A国はB国から直接攻撃された。

つまり、明示的に副詞「直接」が(32a)の「二格」とも(32b)の「カラ格」とも共起し得るということは、受動文の動作者相当句の標識として「二格」が“他のものを介在させない”という意味において直接的な関与者を標示するのと同じように、「カラ格」も直接的な関与者を標示し得ることを示している。これにより、直接的という概念によって「二格」と「カラ格」を区別するという分析は正しくないことが分かる。

それでは、「二格」と「カラ格」は、どのように差別化されるだろうか。第1節で述べた「二格」の基本的意味に遡及すると、「二格」は程度の差こそあれ主格 NP との《一体化》が満たされる。ここに、再び Talmy (1985) がいう「エネルギー伝達」という考え方を援用すると、動作者相当句は、少なくとも「二格」で標示することによって主格または対格へのエネルギーの到達が保証されるという点で、能動文において主格(ガ格)で標示されていたときと同じ資格をもつと言ってよい。

これに対し、「カラ格」はスキーマ的に[起点]として規定されるので、動作者相当句を広い意味で[起点]として解釈できるときには「二格」での標示が可能になる。実際、すでに(25)や(31)にも例を挙げているように、動作者相当句を「カラ格」で標示した場合でも、基本的に「二格」での標示も同時に成立するので、動作者相当句に関しては「二格」が無標の格標識で、「カラ格」は有標の格標識と言ってよい。

この「カラ格」での格標示に関連して、興味深いと思われる例に次のようなペアがある。

- (33) a. 太郎は検察に事情を聞かれた。
b. 太郎は検察から事情を聞かれた。

このとき、(33b)のように動作者相当句「検察」を「カラ格」で標示した場合は、「検察」から「太郎」への働きかけのみが前景化され、逆向きの「太郎」から「検察」へのエネルギー(情報)の伝達は含意しない。これに対し、(33a)のように「検察」を「二格」で標示した場合は「検察」から「太郎」への働きかけが前景化される一方で、「太郎」の意志と無関係に「検察」へのエネルギー(情報)の伝達も起こり得る点に注意されたい。ここで「太郎」の意志と無関係に「検察」へのエネルギー(情報)の伝達が起こるとするのは、例えば、偶然に「太郎」の話を「検察」が耳にした場合であるとか、あるいは「検察」が意図的に「太郎」の話にそば耳をたてたというような場合を想定すればよい。そうすると、「カラ格」で標示したときは《動作者相当句 主格 NP》という一方向的な解釈しかあり得ないのに対し、「二格」で標示したときは《動作者相当句 主格 NP》と《主格 NP 動作者相当句》という両方向をもつことが分かる。このことが、「二

格」と「カラ格」の本来の意味に起因することは言うまでもないだろう。そもそも、能動文において主格（または対格）と与格 NP との間には《主格 NP 与格 NP》という順方向性があり、それが受動化に際して《与格 NP 主格 NP》という逆方向性を担ったものであるのに対し、奪格（カラ格）と主格または対格との間では一義的に《奪格 NP 主格 NP》という逆方向性しかないからである。

また、「カラ格」は、第2節でも触れたように、[起点]を具象化するという本来の意味から、副次的に離脱を含意する。このため、エネルギー伝達の可否という点から見ると、「カラ格」での標示は主格や対格と離脱した状態をプロファイルすることになり、エネルギー到達が保証されなくなる。したがって、次のように、主格または対格へのエネルギーの到達が保証されなければならないときは義務的に「に」で標示される。

- (34) a. 太郎は何人かの人に襲われる。
 b. *太郎は何人かの人から襲われる。

これらの受動文で、動作者相当句を「カラ格」で標示できないのは「襲う」といった事象において、動作者相当句を主格成分あるいは対格成分と離脱した関係でコード化することが不適切であるためと説明される。

上述のように、動作者相当句は、基本的に「二格」で標示され、[起点]として解釈できるとき「カラ格」での標示が可能になると整理できる。では、動作者相当句を「二格」で標示できないケースはあるだろうか。張(1995)も言うように、動作者相当句を「二格」で標示できない例というのは非常に稀であり、次のようなケースに限られる。

- (35) a. #会議資料が秘書に配布された。
 b. 会議資料が秘書から配布された。
 c. 会議資料が秘書によって配布された。

(35)のように移動動詞を述語とする場合は、受動文においても「二格」NPは[着点]として解釈される可能性があり、このことが文全体の意味解釈を不安定にする。つまり、無標の能動態において動詞が「二格」に[着点]の解釈を要求するとき《主格 NP 与格 NP》という順方向的なエネルギー伝達は、明確にキャンセルされない限り、受動化された段階でも保持されるので、順方向的な解釈と逆方向的な解釈との間で曖昧になる。しかも、堀川(1988)が言うように、順方向的な解釈が優先されるために、(35a)においては「二格」標示の方の容認度が低くなる。このとき、動作者相当句は[起点]として「カラ格」で標示されるか、事象全体を引き起こす

ものとして「ニヨッテ」で標示することで、曖昧性による不安定性が解消されることになる。

かくして、第4節および第5節での議論から、受動文における動作者相当句標識としての「ニヨッテ」「ニ」「カラ」は次のように整理される。すなわち、受動文全体が出来事の生起として解釈されるとき、動作者相当句は 出来事を引き起こすもの として「ニヨッテ」で標示される。また、主格 NP と動作者相当句とが2項的に結び付くとき、動作者相当句は基本的に「二格」で標示され、動作者相当句が[起点]として解釈できるとき、あるいは、主格 NP と動作者相当句とが離脱した状態にあることをプロファイルするとき動作者相当句は「カラ格」で標示されるということになる。

以上、本節では、受動文における「二格」と「カラ格」について、主格 NP との2項的な関係によって区別されることを例証した。

7. 結 語

本稿では、現代日本語の「二格」を包括的な分析を目指して、[起点]と[動作者相当句]を中心に意味的な観点から分析を行った。本文で検討した「二格」の特性は次のように要約される：

- [i] 「二格」は、空間次元であれ非空間次元であれ自動詞の主格または他動詞の対格が与格 NP に《一体化》するという軸において一元化され、同時に《一体化》の程度差において個別の意味役割が皮相的に分化する。
- [ii] 「二格」による[起点]は、[着点]から汎用されたものであるから、「二格」へのエネルギー伝達を前提とする点で、[着点]の基本的含意を継承しており、移動主体との乖離を前景化する「カラ格」と弁別的に区別される。
- [iii] 受動文の動作者相当句標識のうち、「二格」は主格または対格へのエネルギーの到達が保証されるのに対し、「カラ格」は離脱の意味が生じるために、主格あるいは対格へのエネルギーの到達はなく、複合辞の「ニヨッテ」は、出来事の生起をつかさどる要素を標示する。これらの点で、「ニ」「カラ」「ニヨッテ」は、相互に弁別的に区別される。

以上により、本稿の後半で取り上げた[起点]と[動作者相当句]は、「二格」の拡張用法として意味的に特徴づけられることが例証されたと思われる。最も重要なことは、現代日本語の「二格」は、[起点]や[動作者相当句]を含め、一貫した原理で有機的に結び付いているのであって、決して偶然によるものではないという点である。ただ、本稿の議論は「二格」の意味役割に関して完全には網羅的でなく、「デ格」や「カラ格」と交替する[理由]については、紙幅の都合上、別稿に委ねたい。

*本稿は、菅井（2000，2001）で個別に提示した事例研究をベースに、最新の研究成果を視野に、拡大発展させたものである。なお、本稿は、投稿原稿の段階で、本誌の匿名の査読者からの的確なコメントを頂戴したので、特に記して謝意を示したい。言うまでもなく、本稿に誤りがあれば、その全ての責任は執筆者自身のものである。

参 考 文 献

- 池上嘉彦（1981）『する と なる の言語学』大修館書店。
- 岡 智之（2005）「場所的存在論による格助詞二の統一的説明」『日本認知言語学会論文集』第5巻，12-22。
- 金水 敏（1991）「受動文の歴史についての一考察」『国語学』第164輯，1-14。
- 国広哲弥（1967）『構造的意味論 日英両語対照研究』三省堂。
- 国広哲弥（1994）「認知的多義論 現象素の提唱」『言語研究』第106号，22-45。
- 国広哲弥（2006）『日本語の多義動詞 理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店。
- 国立国語研究所（1997）『日本語における表層格と深層格の対応関係（国立国語研究所報告 113）』三省堂。
- 柴谷方良（1978）『日本語の分析』大修館書店。
- 菅井三実（2000）「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第20巻・第2分冊，13-24。
- 菅井三実（2001）「現代日本語の『二格』に関する補考」『兵庫教育大学研究紀要』第21巻・第2分冊，13-23，2001b。
- 菅井三実（2002）「構文スキーマによる格助詞『が』の分析と基本文型の放射状範疇化」『世界の日本語教育』第12号，177-193，2002b。
- 杉本 武（1986）「格助詞」奥津敬一郎・田沼善子・杉本 武（共著）『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社，227-380。
- 砂川有里子（1984）「『二』と『カラ』の使い分けと動詞の意味構造について」『日本語・日本文化』（大阪外国語大学研究留学生別科）第12号，71-86。
- 田窪行則（1984）「現代日本語の場所を表す名詞類について」『日本語・日本文化』第12号，89-117。大阪外国語大学。
- 田中茂範（1990）『認知意味論 英語動詞の多義の構造』三友社出版。
- 張 麟声（1995）「二とカラとニヨッテ 受身文における動作主マーカー」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法』くろしお出版，131-140。
- 中右 実（1998）「空間と存在の構図」中右実・西村義樹（共著）『日英語比較選書5・構文と事象構造』研究社出版，8-54。
- 細川由紀子（1986）「日本語の受身文における動作主のマーカーについて」『国語学』第144輯，113-124。
- 堀川智也（1988）「格助詞『二』の意味についての一考察」『東京大学言語学論集 88』321-333。
- 益岡隆志（1982）「日本語受動文の意味分析」『言語研究』第82号，48-64。
- 松田剛史（1986）「受身文の『によって』」『大谷女子大國文』第16号，129-141。
- 森田良行（1988）『日本語の類意表現』創拓社。
- 森田良行（2006）『日本語の類義表現辞典』東京堂出版。
- 森山 新（2005）「格助詞二の意味構造についての認知言語学的考察」『日本認知言語学会論文集』第5巻，1-11。
- 山梨正明（1994）「日常言語の認知格モデル[6] 意味のモード」『言語』第23巻・第6号（1994年6月号），104-109。
- 林 璋（1992）「助詞の意義と用法の体系 格助詞『に』を中心に」文化言語学編集委員会（編）『文化言語学 その提言と建設』三省堂，516-530。

- Hopper, P.J. and S.A. Thompson 1984 " The discourse basis for lexical categories in universal grammar ," *Language*, Vol.60(4), 703- 52.
- Kabata, Kaori and Sally Rice 1997 " Japanese *ni*: the particulars of a somewhat contradictory particle ," In *Ver-spoor, M.H., et al. (eds .) Lexical and syntactical constructions and the construction of meaning. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company*, 102- 127.
- Talmy, L. 1985 " Force dynamics in language and thought ," *CLS*, 21, Part 2, 293- 337.